

『野ざらし紀行』における芭蕉の挫折(二) ―孤屋本『野ざらし紀行』への疑惑―

浜 森 太 郎

一、承前

『野ざらし紀行画巻』(和田御雲氏蔵)の中のたった六箇所の小さなミセケチがすべての問題の発端であった。この六箇所のミセケチを手懸にして、私は、『野ざらし紀行』諸本の系統序列の再検討へと進んだ。そして、従来、定稿本と目されていた『野ざらし紀行画巻』が、実は、天理本『野ざらし紀行』に次ぐ第二稿であるらしい事を発見した。

だが、『野ざらし紀行画巻』はすでに承知のように、中川濁子が松尾芭蕉の依頼を受けて『濁子清書画巻』(三康図書館蔵)を執筆する際の原本である。とすれば、清書本の下敷きになった『野ざらし紀行画巻』は、まぎれもなく定稿本という事になるだろう。

第二稿であるとともに定稿本でもある文章、このディレンマを解くために、私は、さらに詳細に『野ざらし紀行画巻』の表記態度を分析してみた。そして、その結果、興味深い事実が明らかになった。『野ざらし紀行画巻』を執筆する過程で、芭蕉の表記態度そのものが変化していたのである。

芭蕉は最初、訓漢字を多用した漢文書き下し調の文章を書いていた。そこにはむろん、文章の格調を高めたり、主人公の人柄を反映させた

りする文学的配慮が働いていただろう。あるいはまた、この『野ざらし紀行画巻』の所有者となるべき何某かの教養も思い合わされていただろう。だが、それにしても、最初の文章では、心理表現の複雑さやや脱字の多い芭蕉の文章表記の性癖が重なつて、たびたび訓みの正確さが損われた。そして、その過程で芭蕉はようやく強引な訓漢字の利用を控え、誤読を招きやすい訓漢字には、送り仮名を添え始めた。その結果、『野ざらし紀行画巻』の表記は、第一部(江戸旅立から帰郷まで)と第三部(伊勢桑名から江戸帰着まで)とでかなり喰違い、多少の矛盾をはらむ事となった。こうしたやや初発的な表記態度の変化も、『野ざらし紀行画巻』が第二稿だと見る私の判断を支えるものであった。

漢文書き下し調の文章から、より読みやすく、より分かりやすい文章へという芭蕉の表記態度の変化は、高踏派の門人知友たちの中で暗号めいた作品を作っていた二年前(天和三年)の芭蕉には、あるいは考えにくい変化かもしれない。だが、版本の出版を中心にした時代の文化状況は、まちがいなくその変化を求めていたのではあるまいか。貸本屋から借りた版本を数人で輪読する初心の読者たちは、文章を目で見て大ざっぱに文意を把み取る黙読や速読よりは、まず何よりも音

読しやすい文章を望んでいたはずである。

貞享二年（一六五）秋、松尾芭蕉、四十二歳。約九箇月に及ぶ『野ざらし紀行』の旅を通じて、彼の処生観も文学観もみな大きく転換する時期である。私たちは、そのつもりで、彼のこれ以後の作品を眺めなければならぬ。そうすれば、当面する『野ざらし紀行』の諸本の中にも、さらに新しい秩序を見いだす事ができるだろう。

二、孤屋本『野ざらし紀行』への疑惑

さて、問題は、従来定稿と目されてきた『野ざらし紀行画卷』が、定稿であると同時に第二稿でもあるというディレンマを解き明かす事にあった。そして、それは、従来のように、第一稿「天理本」、第二稿「泊船本」、第三稿「孤屋本」、第四稿「野ざらし紀行画卷」という一系統の系統序列を信じる限り解答不可能な問題であった。

『野ざらし紀行』の諸本の成立過程を、全く新しい視点から考察し直す必要がある。明白なのは、この事実である。たとえば、『野ざらし紀行』諸本の系統がもし二系統なら、定稿にしてかつ第二稿という『野ざらし紀行画卷』のディレンマは、たちどころに氷解するだろう。『野ざらし紀行』の諸本を一系統で序列化した従来の本文研究のどこかに、致命的な欠陥があるのではあるまいか。これが、孤屋本『野ざらし紀行』に寄せた私の最初の関心であった。

従来、第三次推敲段階にある本文として位置付けられてきた孤屋本『野ざらし紀行』は、彦根市専宗寺所蔵の一本で、巻末には、次のような識語が残されている。

一日遊深川之蕉庵而、拾得遮莫之一巻、而帰即写旅店牕下、以左

右之晨夕之云爾

寅 六月初旬写之者也

孤屋

この識語の最後の一行から、孤屋本『野ざらし紀行』は、貞享三年（寅、一六六）六月初旬、芭蕉の門人小泉孤屋によって書写された本文であるらしい事が推測される。ただし、現存の「孤屋本」は、彦根の森川許六の手を経て、さらにその門人の林篁の手で筆写された本文だと言われている。したがって、転写にともなう多少の文字の乱れは当然予想された。

だが、孤屋本『野ざらし紀行』の文字の乱れは、実際に検証すると多少どころの騒ぎではなく、むしろ騒然としているのである。しかも、それは、奇妙な性質を持つている。これも、まず、実例を上げるのが便利である。最初に掲げるのは、孤屋本『野ざらし紀行』の誤字・脱字の例で、中に文字の省略や改訂かと疑われるものも含めたのは、何をもって正しい表記とするかが少々曖昧な当時の書き言葉の実情を考慮したためである。

表一(8) 孤屋本「野ざらし紀行」独自の表現・表記
(誤字・脱字。あるいは省略・改訂とも考えられる例)

No.	天理本	野ざらし紀行画卷	孤屋本	泊船本
2	けむ	けむ	けん	けむ
3	八月	八月	は月	八月
18	たえず	たえず	たへす	たえず
22	けむ	けむ	けん	けむ
40	有けるを	有けるを	有けるに	有けるを

212	207	185	173	151	150	138	137	122	120	114	111	109	103	97	75	73	54	50	49
共に	あふ	伏見	たか	たるそ	たる	死に	おもひて	日	耳を	みえて	たふとし	有て	あそふ	木を	汝か	拝めよ	をんな	見えて	ほのくらく
ともに	逢ふ	伏見	誰か	たるそ	たる	しに	おもひて	日	耳を	みえて	たふとし	有て	かくる	木を	汝か	おかめよ	をんな	見えて	ほのくらく
友に	逢（ ）	伏見の	誰（ ）	たり	たり	死（ ）	おもひ（ ）	月	耳も	見へて	たふとく	あり（ ）	かくれ	木（ ）	なんちに	おかめと	おんな	見へて	ほのくらく
ともに	あふ	伏見	誰か	たるそ	たる	死に	おもひて	日	耳を	見えて	たふとし	有て	かくる	木を	なんちか	おかめよ	をんな	見えて	ほのくらく

※通し番号は、巻末付表―(B)（孤屋本『野ざらし紀行』独自の表現・表記）によった。以下同じ。

この表を一見しただけでも、孤屋本『野ざらし紀行』の書写の粗雑さがわかるだろう。全体でもわずかに二千三百四十字ほどの『野ざらし紀行』を書写するのに、25箇所もの誤字・脱字が含まれている。これは四百字詰め原稿用紙一枚あたり五箇所もの誤字・脱字があるのに相

当する。しかも、その25箇所もの誤字・脱字は、孤屋本『野ざらし紀行』独自の表現・表記全体の31%を占めるのである。その内、特に目立つのは、

- 40 有けるに（他本「有けるを」）
 75 なんちに（他本「汝か」「なんちか」）
 97 木（を）（他本「木を」）
 109 あり（て）（他本「有て」）
 120 耳も（を）（他本「耳を」）
 137 おもひ（て）（他本「おもひて」）
 138 死（に）（他本「死に」「しに」）
 173 誰（か）（他本「誰か」「たか」）
 185 伏見の（他本「伏見」）

※（ ）内は筆者の補筆。

などの助詞を中心にした軽い誤字・脱字である。中には、138「死（に）」や173「誰（か）」のような送り仮名の不足した例も含まれている。また、

- 3 は月（他本「八月」）
 122 月（他本「日」）
 212 友に（他本「共に」「ともに」）
 2 けん（他本「けむ」）
 18 たへす（他本「たえす」）
 22 けん（他本「けむ」）
 50 見へて（他本「見えて」）
 114 見へて（他本「見えて」）

のような漢字の誤写からは、やや軽率な書写態度が窺われる。さらにまた、

などの活用語尾の誤写からは、「孤屋本」の筆者が、「む」を「ん」と書き、「え」を「へ」と書く書き癖を持っていたらしい事が窺われる。これもまた、極めて私意的な書写態度の反映であろう。このような誤字・脱字は、むしろ原本を手元に置いて臨書するような通常の書写の際には起り得ない。孤屋本『野ざらし紀行』は恐らく通常の写本とは違ったかたちで出来上った本文なのである。

念のために、私はさらに孤屋本『野ざらし紀行』独自の表現・表記（巻末付表(B)）の中から、「孤屋本」だけが漢字で表記している言葉拾ってみた。

表―(9) 孤屋本『野ざらし紀行』独自の表現・表記
(漢字表記)

No.	天 理 本	野ざらし紀行画巻	孤 屋 本	泊 船 本
10	此たひ	此たひ	此旅(度)	此たひ
23	こよひ	こよひ	今宵	こよひ
24	あす	あす	明日	あす
25	ち、	ち、	父	ち、
35	みちのへ	道のへ	道野(部)	道のへ
52	千とせ	千とせ	千年	千とせ
59	ある	ある	有(或)	ある
62	あか名	あか名	我名	あか名
64	たき物	たき物	焼物	たきもの
65	とふ	とひて	問て	とひて
84	おくに	おく	奥に	おくに
87	おく	おく	奥	おく

228	218	(99)	188	148	142	131	128	105	102	98	96	95	89
ふた、ひ	まこと		ふしみ	なめる		います	しのふくさ		おほくは	ひ、き	おく	ひかれて	へたる
二たひ	まこと		ふしみ	名のる	かた	います	しのふ草	また	おほくは	ひ、き	おく	ひかれて	へたる
二度	誠		躑躅いけて	伏見	名乗	方	今須	忍ふ草	又	多くは	響	奥	経たる
二たひ	まこと		つ、しいけて	ふしみ	名のる	かた	います	しのふ草	また	おほくは	ひ、き	おく	ひかれて

その結果を見ても、やはり「孤屋本」の筆者が文章を一度頭の中で意識しながら漢字に書き替えていったらしい事が窺われる。たとえば、

10 此旅(度) (他本「此たび」)

35 道野(部) (他本「道のへ」「みちのへ」)

59 有(或) (他本「ある」)

などの例は、はっきり文字使いの点で適切を欠くもので、作者芭蕉ならこのような誤字はまず書かない例である。あるいはまた、次のような、和語を訓漢字二字で表記する例も、うっかり音読される事を恐れて、芭蕉ならなるべく避ける表記である。

23 今宵 (他本「こよひ」)

24 明日 (他本「あす」)

52 千年

(他本「千とせ」)

62 我名

(他本「あか名」)

64 焼物

(他本「たき物」「たきもの」)

これらを見ても、「孤屋本」の筆者がかなり大胆に和語を訓漢字に書き直している事が明らかだろう。このような書写態度も、むしろ原本を手元に置いて臨書するような通常の書写から生まれるものではない。言いかえれば「孤屋本」の筆者は、もともと原本を忠実に転写して後世に残そうとしているわけではないのである。

彼が狙っているものは何か。しかし、このような問は、実は、「孤屋本」筆者の手によって予め禁じられている。なぜならこの「孤屋本」は、奥書によって、芭蕉庵に放置されていた「遮莫之一巻」(書き捨ての一卷)だと予めことわられているからである。

それにしても、特に軽微な誤字・脱字が多すぎるのは事実である。筆者が文章を頭の中で一度意識しながら文字化する過程で、多量の軽微な誤字・脱字が生まれるような書写とはいかなるものか。その可能性がある書写といえ、それは、「孤屋本」の筆者が『野ざらし紀行』の音読を耳で聞き、それを頭の中ですばやく意識しながら文字に替えるような書写である。具体的には、『野ざらし紀行』の講読の席の手控の類が考えられるだろう。

またそう考えれば、

3 八月(他本)↓は月(孤屋本)

10 此たひみちの(天理・画卷)↓此たひ路の(泊船)↓此旅路の(孤屋本)

のような音読の際の小さなトラブルを思わせる誤写の道筋も明瞭になるだろう。さらにまた、わずかな痕跡だが、孤屋本『野ざらし紀行』には、

梅林 秋風居住の所のよし

梅しろしきのふや鶴をぬすまれし

という注釈めいた一文まで残されている。

一方、「孤屋本」独自の表現・表記の中には、

111 たふとし(他本)↓たふとく(孤屋本)

122 日(他本)↓月(孤屋本)

のような、単純な字型の読み誤りを思わせる例もわずかながら含まれている。これも、講読者の誤読の反映と考える事ができるだろう。ただし、「孤屋本」の本文は、芭蕉↓孤屋↓許六↓林篁と続く転写の過程を含むため、表記上のすべての現象を講読の際のトラブルとして説明する必要はない。要するに、複数の転写の中の一つ(あるいは二つ)に、講読の際のトラブルが発生したのである。このように考えれば、臨書のような通常の書写ではとうてい考えられない大量の誤字・脱字といい、筆者の書き癖を反映した仮名使いといい、さらにまた、筆者が文章を一度頭で意識した上で文字化した痕跡を示す訓漢字の使いぶりといい、いずれも合理的に説明する事ができるだろう。

最後に念のために、孤屋本『野ざらし紀行』独自の表現・表記(付表(B))の中から、独自の仮名表記を拾い上げて表に掲げる。

表-10 孤屋本『野ざらし紀行』独自の表現・表記

(仮名表記)

No.	天理本	野ざらし紀行画卷	孤屋本	泊船本
67 6	初 降て	初 降て	はしめ	初 降て

(205)	(200)	(198)	192	176	170	123	108
有	有	有	有	有	有	有	有
既	既	既	既	既	既	既	既
暮	暮	暮	暮	暮	暮	暮	暮
出	出	出	出	出	出	出	出
辛	辛	辛	辛	辛	辛	辛	辛
崎	崎	崎	崎	崎	崎	崎	崎
あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり
すてに	すてに	すてに	すてに	すてに	すてに	すてに	すてに
くれ	くれ	くれ	くれ	くれ	くれ	くれ	くれ
いつる	いつる	いつる	いつる	いつる	いつる	いつる	いつる
からさき	からさき	からさき	からさき	からさき	からさき	からさき	からさき
かけて	かけて	かけて	かけて	かけて	かけて	かけて	かけて
其かけに	其かけに	其かけに	其かけに	其かけに	其かけに	其かけに	其かけに
雀かな	雀かな	雀かな	雀かな	雀かな	雀かな	雀かな	雀かな
有	有	有	有	有	有	有	有
既二	既二	既二	既二	既二	既二	既二	既二
暮	暮	暮	暮	暮	暮	暮	暮
出	出	出	出	出	出	出	出
辛	辛	辛	辛	辛	辛	辛	辛
崎	崎	崎	崎	崎	崎	崎	崎
懸て	懸て	懸て	懸て	懸て	懸て	懸て	懸て
其陰に	其陰に	其陰に	其陰に	其陰に	其陰に	其陰に	其陰に
雀哉	雀哉	雀哉	雀哉	雀哉	雀哉	雀哉	雀哉

※通し番号に()をつけた用例は、該当する本文を持つ諸本が少な
いので、純粹に独自の仮名表記とはいいがたいが、参考の意味
で掲げた。

孤屋本『野ざらし紀行』独自の仮名表記、10例（ただし、参考3例を含む）。この分量は、「孤屋本」独自の表現・表記全体（84例、付表（B））の12%にあたる。実例が少ないせいもあって、表記上にこれといった特徴は見出せない。ただし、次の一例については、誰にでも正確に訓める文章を書くこうとする芭蕉の表記意図が読めるかもしれない。

6 ふりて （他本「降て」、おりて）とも読める。

だが、総体として言えば、孤屋本『野ざらし紀行』独自の表現・表記は、先に見た通り芭蕉自身の表現意識を反映したものだとはとうてい考えがたい。また、そこに多量に散在する誤字・脱字もやはり、奥書にことわるような「遮莫之一巻」（書き捨ての巻）なるが故の誤字・脱字ではない。したがってまた、このような「孤屋本」を他の諸本と同等に並べて前後関係を云々してきた従来の研究成果は、改めて検証し直さなければならぬだろう。孤屋本『野ざらし紀行』への疑惑は、こうして確実なものになった。

三、孤立した孤屋本『野ざらし紀行』

弥吉菅一氏の研究によれば、『野ざらし紀行』諸本の推敲過程を手懸りにして成立順序を定めるための指標は、次の七点だという。^{注3}

- (一)、「箱根」と「大井川」の条の前書における「終日」の有無。
- (二)、「道のべの木槿は馬にくはれけり」の句における前書「眼前」と「馬上吟」との相違。

- (三)、「伊勢参宮」の条における前書の前後関係。

- (四)、「大和竹の内」の前書における「藪より奥に家有」という一文の有無。

- (五)、「春なれや名もなき山の薄霞」の句における「薄霞」と「朝霞」との相違。

- (六)、「つゝ、じいけて其陰に干鰯さく女」と「菜畠に花見兒なる雀哉」の二句、およびそれぞれの句の前書の有無。

- (七)「行駒の麦に慰むやどり哉」の句の前書の中の「山中」と「山家」との相違。

弥吉菅一氏は、これら七点の比較分析によって、第一稿「天理本」、第二稿「泊船本」、第三稿「孤屋本」、第四稿「野ざらし紀行画卷」という一連の系統序列を定めたのだが、その際に弥吉氏は、これらの諸本をそれぞれ第一次推敲段階の本文、第二次推敲段階の本文という呼び方で呼んだ。その理由は、たとえば、初稿本と推定される「天理本」でさえ、芭蕉の手でみごとに清書された定稿本の体裁を保っていたからである。この本文を、単純に草稿として片付ける事は不可能であった。そこで、弥吉氏は、第一次推敲段階の定稿、という考え方を持ち出したのである。これによって、清書本（定稿）であると同時に

草稿でもあるという『野ざらし紀行』諸本の矛盾した性格は、一応水解するかに見た。

だが、「孤屋本」に限っては、この論法が通しない。「孤屋本」の内実は先に見た通り極めて粗雑な文章であって、決して定稿と呼べる性質の文章ではないからである。しかも、さらに不思議な事に、弥吉氏の言う第三次推敲段階に位置する本文は、現在でもこの「孤屋本」一本しか発見されていないのである。それにもかかわらず、弥吉氏はあえて第三推敲段階なるものを想定している。この第三次推敲段階の想定にも、あるいは奥書に言う「遮莫之一巻」(書き捨ての一卷)ということわりが大きく作用していたかもしれない。しかし、先に見た通り「孤屋本」の粗雑さは、一見未定稿を粧^まつてはいるが、芭蕉の手に成る未定稿とはその性質を異にする。私たちは、「孤屋本」筆者の詐欺を充分に疑ってよいのである。

だが、弥吉菅一氏が、「孤屋本『野ざらし紀行』を第三次推敲段階の本文と考えたには、むろんそれなりの理由もあった。先の七つの指標で言えば、「孤屋本」と「泊船本」とは極めて密接した文章だが、ただ一つ、(三)「伊勢参宮」の条の前書の文章に違いがあり、それが、「泊船本」第二稿・「孤屋本」第三稿の決め手になったのである。具体的には、両者は、それぞれ「腰間に寸鉄を不帶^{ふたい}云々」の文章の位置点線部)が次のように相違する。

泊船本	孤屋本
松葉や風瀑か伊勢に有けるを 尋音信て十日はかり足をと、む。 暮て外宮に詣侍りけるに、一の 鳥井の陰ほのくらく、御燈処々 に見えて、また上もなき峯の松	松葉屋風瀑か伊勢に有けるに 尋音信て十日はかり足をと、む。 腰間に寸鉄を不帶、襟に一囊を 掛けて手に十八の珠を携ふ。

風身にしむはかりふかき心を起して

みそか月なし千とせの杉を

抱^かあらし

腰間に寸鉄を不帶、襟に一囊を懸て手に十八の珠を携ふ。僧に似て塵あり。俗に似て髪なし。我僧にあらずといへとも鬢なきものは浮屠の属にたくへて神前に入をゆるさす。

僧に似て塵有。俗に似て髪なし。我僧にあらずといへとも、髪なきものは浮屠の属にたくへて神前に入事をゆるさす。

暮て外宮に詣侍りけるに、一の鳥井の陰ほのくらく御燈処々に見へて、また上もなき峯の松風身にしむはかりふかき心を起してみそか月なし千年の杉を抱風

孤屋本『野ざらし紀行』は、ただこの一箇所が『野ざらし紀行画卷』の文章の型に似ている事から、「泊船本」と『野ざらし紀行画卷』との中間に位置する第三稿と定められたのである。だが、考えてみれば、これも不思議な判断である。なぜなら、従来の研究によれば、この「伊勢参宮」の条の「泊船本」から「孤屋本」への改訂は極めて不可解な改訂だとされていたからである。^{注4}文章の改訂意図が不可解であるにもかかわらず、推敲過程だけは予め定められていたのである。しかも、この「孤屋本」に類する本文が、他に一本も発見されていないにもかかわらずである。

四、「伊勢参宮」の条の謎

さて、問題の「伊勢参宮」の条の文章に帰ってみよう。従来の解釈によれば、貞享元年(一六八四)八月三十日の夕方、松尾芭蕉は、伊勢山田大世古町一丁目の松葉屋風瀑の家を出て、伊勢の外宮の一の鳥井付

近に立ち、「また上もなき峯の松風」と歌った西行法師を思い、深い感激に包まれた。だが、さらに神前まで進んだ時、不運にも神官に見咎められて、ついに参拝を許されなかった、と解されてきた。つまり、事件の一切は、「泊船本」型の文章に従って、伊勢の外宮で起こったものとして解釈されてきたのである。その立場からすれば、参拝禁止のいきさつを告げる「腰間に寸鉄を不帯」以下の文章が、「暮て外宮に詣待りけるに」の前に移されるといふ「孤屋本」の改訂は不可解と言わざるを得ない。これでは、参拝禁止の一件がいつどこで起きた事件なのか要領を得ない事になり、文意がいつそう不可解になるからである。

しかし、この疑問は、やがてあっさりと解けた。^{註5} もともと、事件の一切が伊勢の外宮で起きたとする私たちの前提そのものが、誤っていたのである。事実経過から言えば、芭蕉は、まず伊勢の内宮に参拝しようとして禁足され、仕方なく外宮の一の鳥井付近まで帰ってきていた。したがって、「腰間に寸鉄を不帯云々」の文章が、「暮て外宮に詣待りけるに」の前に移されたのは、要するに伊勢参拝の一部始終を事実経過に従って並べ替えたのだと考えればよかった。しかも、この文章の改訂は、実は『野ざらし紀行画卷』の絵の図柄を抜きにしては考えられない改訂であった。つまり、内宮での参拝禁止の一件を何の説明もななくいきなり描いた『野ざらし紀行画卷』型の文章は、内宮を正面に、外宮を左手後方に小さく描いた画卷の絵と一対になって初めて読解可能な文章だったのである。

一方、「泊船本」型の文章は、大方の予想とは違って伊勢参拝の一部始終を事実経過に従って忠実に再現しようとする文章ではなかった。神前参拝を果たせなかった松尾芭蕉の無念やるかたない心中を、卒然と湧き上がる心象のかたちで再現しようとした文章だったのである。し

たがって、その文章の中から「腰間に寸鉄を不帯」以下の一部分を取り出して、前に移したからと言って、心象を中心にした文章が事実経過を描いた文章に変わるわけではない。そのため、画卷の絵を抜きにして「伊勢参宮」の文章だけを読めば、文意はいっそう不可解になるのである。とすれば、絵を持たない「孤屋本」において「伊勢参宮」の条だけが、『野ざらし紀行画卷』型に改訂される事が、はたしてあるだろうか。

先にも述べたように、『野ざらし紀行』諸本の成立順序を示す七つの指標の内の六箇所までは、「泊船本」と「孤屋本」とが一致する。しかも、その内の第四点、「大和竹の内」の前書における「藪より奥に家有」といふ一文は、決して画卷系の『野ざらし紀行』には現われるはずのない一文である。なぜなら、『野ざらし紀行画卷』にしても『濁子清書画卷』にしても、いずれもこの「大和竹の内」の条に、藪の中にぽつんと建っている一軒の草庵を描いており、この絵によって「藪より奥に家有」といふ説明が不用になっているからである。また「孤屋本」は、その表記から見ても、『野ざらし紀行画卷』よりは泊船本『野ざらし紀行』にはるかに近いだけでなく、「孤屋本」の次のような誤読は、明らかに「泊船本」の本文を下敷きにした際の誤読である。

- | | |
|-------------------|------------|
| (A) 此たひみちのたすけとなりて | (天理本) |
| (B) 此たひみちのたすけとなりて | (野ざらし紀行画卷) |
| (C) 此たひみちのたすけとなりて | (濁子清書画卷) |
| (D) 此たひ路のたすけとなりて | (泊船本) |
| (E) 此旅路のたすけとなりて | (孤屋本) |
- もし「孤屋本」の筆者が、画卷系の本文(B)・(C)を見ていたとすれば、彼がこの箇所を「此旅路のたすけとなりて」と誤読する事は、ま

ず無かったにちがいない。これらを見ても「孤屋本」が「泊船本」を下敷きにした本文であることは、まずまちがいのない事実である。

五、不思議な「孤屋本」

だが、それにしては、奇妙な事がある。今、先に問題とした「伊勢参宮」の条の「腰間に寸鉄を不帯」以下の文章を(A)天理本・(B)『野ざらし紀行画卷』・(C)『濁子清書画卷』・(D)泊船本・(E)孤屋本の順に对照してみると、その奇妙さが少しは見えてくる。

(A) 腰間に寸鉄を不帯	① 襟に一囊をかけて手に十八のたまを携ふ。
(B) 腰間に寸鉄をおひす	襟に一囊をかけて手に十八の珠を携ふ。
(C) 腰間に寸鉄をおひす	襟に一囊をかけて手に十八の珠を携ふ。
(D) 腰間に寸鉄を不帯	襟に一囊を懸て 手に十八の珠を携ふ。
(E) 腰間に寸鉄を不帯	襟に一囊を掛けて 手に十八の珠を携ふ。
(A) 僧に、てちり有、そくに②	③ 髪なし、我僧にあらずといへ共
(B) 僧に似て塵有、俗に	髪なし、我僧にあらずといへとも
(C) 僧に似て塵有、俗に	髪なし、我僧にあらずといへとも
(D) 僧に似て塵あり、俗に	髪なし、我僧にあらずといへとも
(E) 僧に似て塵有、俗に	髪なし、我僧にあらずといへとも
(A) ④ もと、りなきものは	ふとのそくにたくへて、神前に入事をゆるさす。
(B) ・・・・・	浮屠の属にたくへて、神前に入事をゆるさす。
(C) 髪なきものは	浮屠の属にたくへて、神前に入事をゆるさす。
(D) 髪なきものは	浮屠の属にたくへて、神前に入事をゆるさす。
(E) 髪なきものは	浮屠の属にたくへて、神前に入事をゆるさす。

「孤屋本」(E)の表記は、点線①③⑤を見る限り、「泊船本」(D)に似ている。

だが、奇妙な事に、「泊船本」(D)では、点線⑤の部分に「入事」の「事」の一字が脱落しているにもかかわらず、「孤屋本」(E)では、それが補われているのである。この箇所は、画卷系の二本(B)(C)ともに「入事」とあり、非画卷系の「天理本」(A)でも「入事」とあるため、その三本のいずれを下敷きにしても補う事ができる。しかし、「天理本」(A)では、点線④の部分「もと、りなきものは」とあり、『野ざらし紀行画卷』では、それがまったくの空白である。したがって「孤屋本」の筆者が『野ざらし紀行』を書写する際に参照したもう一つの本文を求めるとすれば、それは、『濁子清書画卷』(C)（または、その系統の一本）と考えられるのではないのである。つまり「孤屋本」の筆者は、「泊船本」を下敷きにしながら、その一方で、明らかに『濁子清書画卷』を参照して『野ざらし紀行』を書き上げていたのである。

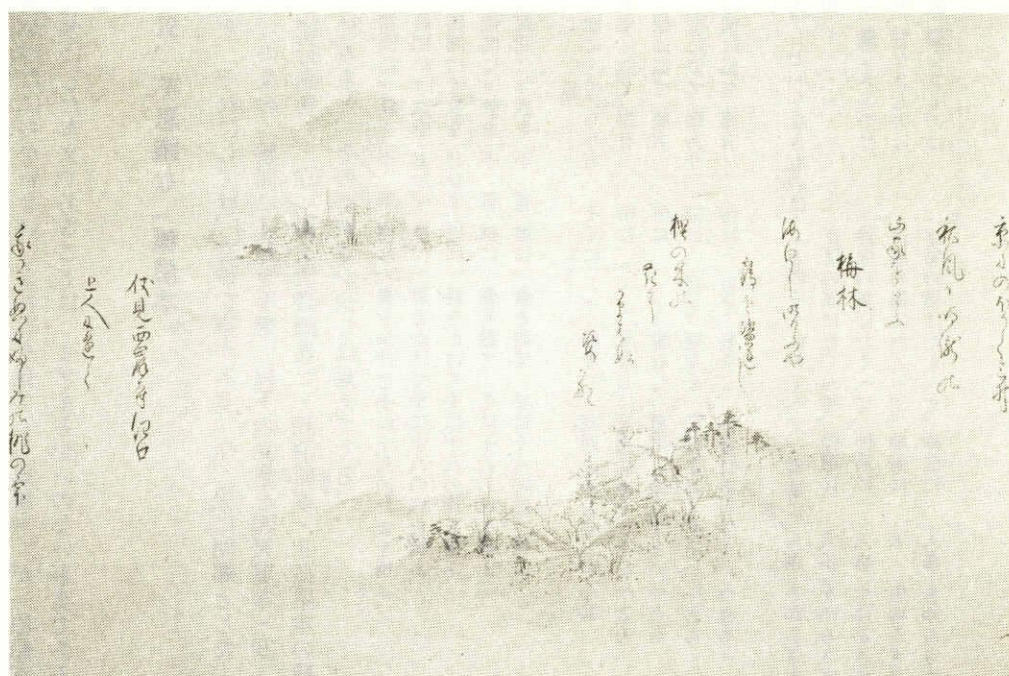
最後に、これもわずかな痕跡だが、「孤屋本」の筆者が、画卷系の本文を参照していたらしい証拠をもう一つ上げよう。

京に登りて三井秋風か鳴滝の山家をとふ。

梅林 秋風居住の所のよし

梅しろしきのふや鶴をぬすまれし

前書の中に、三井秋風の山荘を訪ねた事が明記されているので、普通ならば「梅林」の下の「秋風居住の所のよし」という「孤屋本」独自の注記は必要ではない。だが、この部分を『濁子清書画卷』の本文に照らしてみると、ちょうどこの「梅林」なる詞書の下に、「梅林」のある小高い丘陵と三井秋風の別荘とが描かれている。この図柄なら「孤屋本」独自の注記は、絵に対する注記として立派に通用するのである。やはり「孤屋本」は、『濁子清書画卷』を参照して執筆された本文だと言えるのではあるまいか。



六、第三次推敲段階は実在しない

さて、以上の分析によって、孤屋本『野ざらし紀行』の表記と表現との両面に渡る特性が明らかになった。「孤屋本」の筆者（森川許六または林篁）は、「泊船本」を下敷きにし、さらに『濁子清書画巻』（または、同系の写本）を参照して「孤屋本」を書き上げたが、その際、彼は画巻系の本文と文章系の本文との本質的な差違には気付かなかった。「孤屋本」の欠陥は、そのために生じたものである。

孤屋本『野ざらし紀行』なるものを、軽々しい私意によって捏造した者は誰か。そしてその時期はいつか。奥書を信ずるとすれば、その答は単純であろう。小泉孤屋が、貞享三年六月に筆写したものである。だが、「遮莫之一巻」（書き捨ての一卷）なることわりを使って、「孤屋本」筆者のいかかわしい作意をカモフラージュしているこの奥書をそのまま信じる事はできない。とすれば、残る人物は、森川許六か林篁。中でも森川許六は、元禄十一年（六六）、京都の風国の手で出版された『泊船集』に激しい非難を浴びせたにとどまらず、自らの手でその非を正すべく『校正泊船集』と題する一書まで執筆している。孤屋本『野ざらし紀行』の下敷きにされた泊船本『野ざらし紀行』は、この『泊船集』に収められた『野ざらし紀行』なのである。森川許六には、『泊船本』の本文を手直しするのに充分な動機があったと考えてよい。しかも、彼は自分の執筆した『校正泊船集』所収の「草枕紀行」（『野ざらし紀行』において、すでに、先の「伊勢参宮」の条の「腰間寸鉄を不帯」以下の文章を「孤屋本」の場合と同じように発句の前に移している。さらに加えて、元禄十年から十一年にかけて、彼が京の向井去来と取り交した往復書簡『俳諧問答』の中で、森川許

六は、『泊船集』の編者風国を非難するついでに、『野ざらし紀行』所収の芭蕉の発句「命二ツ中に活たる桜哉」（『泊船集』について、「是、命二ツのと文字あまり也。予芭蕉庵にて借用の草枕二、慥にの、字入たり。」と発言している。これが事実だとすれば、森川許六は、すでに元禄五・六年の江戸在勤中に『野ざらし紀行』を借用する機会を持っていた事になる。先の「伊勢参宮」の条のような本文の修正は、このような許六にして初めて可能だった事ではあるまいか。

それでは、すでに元禄五・六年頃『野ざらし紀行』の一本を書写していたはずの森川許六が、何故改めて「孤屋本」なるものを捏造しなければならなかったのか。それは恐らく、彼の所持していた『野ざらし紀行』の一本（濁子清書画巻系の一本）と『泊船集』所収の一本とを比較した森川許六が、自分の所持する一本に自信を持つことができなかつた事に由来するだろう。森川許六が『泊船集』の杜撰さを立証するには、画巻系の『野ざらし紀行』の特長と文章系の『野ざらし紀行』の特長とを同時に兼ね備えた本文が是非必要だったのである。

かくして、恐らく孤屋本『野ざらし紀行』は捏造された。その時期は確定できないが、『泊船集』が出版された元禄十一年（六六）から許六の没した正徳五年（七五）までの間に限られる。また、もし仮りに現存する「孤屋本」が、伝えられるごとく林篁の筆写したものだとするれば、それを口述した人物が森川許六だったのであるまいか。

要するに、泊船本『野ざらし紀行』と『野ざらし紀行画巻』との中間にあつて両者を繋いでいた第三次推敲段階は、どうやら実在しなかつたのである。

注1、拙稿「『野ざらし紀行』における芭蕉の挫折（二）」（『三重大学教育学部研究紀要』第32巻2号）

注2、弥吉菅一等編『改版野ざらし紀行・鹿島詣』（明玄書房刊）45頁参照。

注3、弥吉菅一等編『改版野ざらし紀行・鹿島詣』（明玄書房刊）50頁参照。

注4、たとえば阿部正美氏は、『芭蕉伝記考説』130頁において「不可解といはざるを得ない」と述べている。

注5、拙稿「『野ざらし紀行』その方法のディレンマ（上）」（『日本文学』昭和55年9月号）参照。

注6、本文の引用は、注2所収の校本を用いた。以下同じ。

注7、『濁子清書画巻』では、許六の発言どおり「命二ツ」の句は「命二ツの中に生たる桜哉」とある。

注8、「孤屋本」の筆蹟は、森川許六の筆蹟とはちがっているように思われる。